# 「バーの扉」＊ススキノ編＊後編
# Frontier (Fugitive) For Final Fantasy

札幌市医師会
華岡青洲記念病院
華岡（はなおか）　慶一（けいいち）

故郷では、情念の澱（『歎異抄』での「煩悩」の澱）の「ありさま」は東京とは異なっている。札幌の地下には、水脈／土壌に未だ染み入らない情念が自壊もせぬまま漂っている。だから私は、地元では地表（象徴意識）を移動する……。途中、バーならぬバルでテキーラを煽り、さらに南の「オーセンティックバー」を目指した。そこでは、寡黙なマスターが店名とは真逆の雰囲気を醸し出している。扉を開けた時は、もうすでに“ギムレットには早い時間”ではなかった。二杯目のジントニックを味わいながら閃いた。「うーむ、今日は、ここじゃない。今夜の気分は……」と、テキーラが効いてきた意識が出した結論は、豊川稲荷の前のビルの店だった。その店は前２軒と程近い（外れの）バーで、四半世紀以上前から知っている。やはりキツネに導かれているのか？　でもなぜそこなのだろう？　通い始めた当時、関心は（自分の仕事中心で）人には向いていなかった（バーでの他人の会話に興味がなかった）。また、興味を引く人物もいなかった（気が付かなかった）。その店のマスターに思い入れがあったわけでもない。深夜の緊急カテ手術後にススキノへ仲間と繰り出した（主治医はICUに残して）エピソード記憶と感情は鮮明だ。まさに、『歎異抄』の「三毒の煩悩」の内の「欲」に満ちていた時期だった。マスターの「欲」とぶつかり合い、「二度と来るか」と言っては（「三毒の煩悩」の「怒り」）通っていた店だった。あの頃は若かった。また自分の心の動き（もう一人の自分を含めて）も十分に意識していなかった。……扉を開けた時、客はいなかった。それから、三人組と、一人客が入ってきた。私は、客を呼ぶ方である。それがポジティブな賑わいとなることも多い。しかし、その夜は、自分自身の「ネガティブな感情（波長）」が人のネガティブな側面を引き寄せた。今振り返ると、この夜、私は、そうなること（そう感じてしまうこと）を予知していたような気がする――今は気づいたあの感触「すべては自分自身の思考が（波長が）引き寄せたものである」という感覚を……。

「良いバー」ではファンタジーが飛び交っているのが見える。それが反発したり、引き合ったり、時に融合する。私のファンタジーはフランス的で、イギリス的ではない。ある時から、思考停止ボタン（自分もかつて押した経験論的言い訳ボタン）を押したままにしていることが「大人の正解」であると嘯く奴から逃げた。しかし、その夜は、自分だって似たようなものだ（『The Hollow Men』）と気がついてしまった。他人のファンタジーの意味の検証は難しい。自分も毒を吐き出して（カタルシス）、別人になり、また溜まるともう一人の自分が「出禁の店」に乗り込むことを繰り返しているのではないか。そのバーに、本当に行かなくなるのは、そこがもはやファンタジーランドではなくなった時だ（どちらの自分にとっても）。バーでの諍いに説得や和解は期待してはいけない（似合わない）。何故ならそれは、結局は自分のファンタジーとの戯れだからだ。面白いか、つまらないかは、本人の想像力の問題だ。……ところで僕はあの店で出禁になったのであろうか？　ポケットから支払い計算のメモが出てきた。過去の経験では、「出禁の決め台詞」は「本日のお代は結構です」だった……。思うに、この状況は、自分自身が引き寄せたものである。院内会議の見たくない（聞きたくない）内容から逃げたい（否定したい）思いで、その対処の代わりに（それを抱えたまま）ネガティブな自分が「バーの扉」を開けてしまった。結果、その「ネガティブな波長の思考」に導かれた事象が起こったのだ（負の引き寄せ）。

その出来事――自身の敢えて因果律に背離（背理）するかのような行動――の意味は、今こうして「気づいたこと」に思い至るための「未来からメッセージ」だったのではないか？　それは、自分が求めた「未来の記憶」に至るための「超時空的無意識」・「ゼロ・ポイント・フィールド」との繋がりが仕向けたもの（量子もつれとシンクロニシティ）ではなかったのか？　だとすればそれは（この世界では）すでに決まっていたことなのか？　それから逃げたかったものとは、自分のネガティブな「エゴ」・「表面意識」（『歎異抄』の「三毒の煩悩」の「愚痴」）だったのではないか？　硬直化して、体積と運動を失った劣化した脳活動との決別、それがこの行動の意味だったのではないか？　『歎異抄』によれば、百八つの「煩悩」は今生において、克服できない「治らない難病」であるという。私は、「治る難病」・「死後が暗い心の病」の克服こそが鍵であることにやっと気づいた。こうして書いている最中にも、別の場所で、一人の自分がもう一人の自分に「出禁」を告げた（シンクロニシティ）。……やはりそうなのか。「気づいたこと」とは、仏教の空思想（色即是空）と量子力学（量子真空）との構造類似性――実体なき関係性（縁起）や意識観測による状況収縮（量子もつれの解消）――物質・精神・エネルギーの絡み合いの関係――だ。思うに自身の二面性（もう一人の自分）の構造は「バーの扉」の向こう側だけの話ではない。それは、今世（人生）の日常にもフィットする。それは、人生を真っ向から一面的な戦いに挑んだ偉大な先人たちが辿った結果の自分なりの回避策――想像力の欠けた自分自身に気づいた時、絶望して自身全てを人生の出禁にしないための方策――であった（『永劫回帰』を回避する世界線を探して……）。

“History doesn’t repeat itself, but it ramifies and often rhymes.”

今日もまた、自分自身の「心の病（ネガティブな波長）」克服の日々は続く。

……分岐世界でも見かけは変わらない日常……